

ROOFING / SIDING / INSULATION / RENEWAL

防水ジャーナル

2021

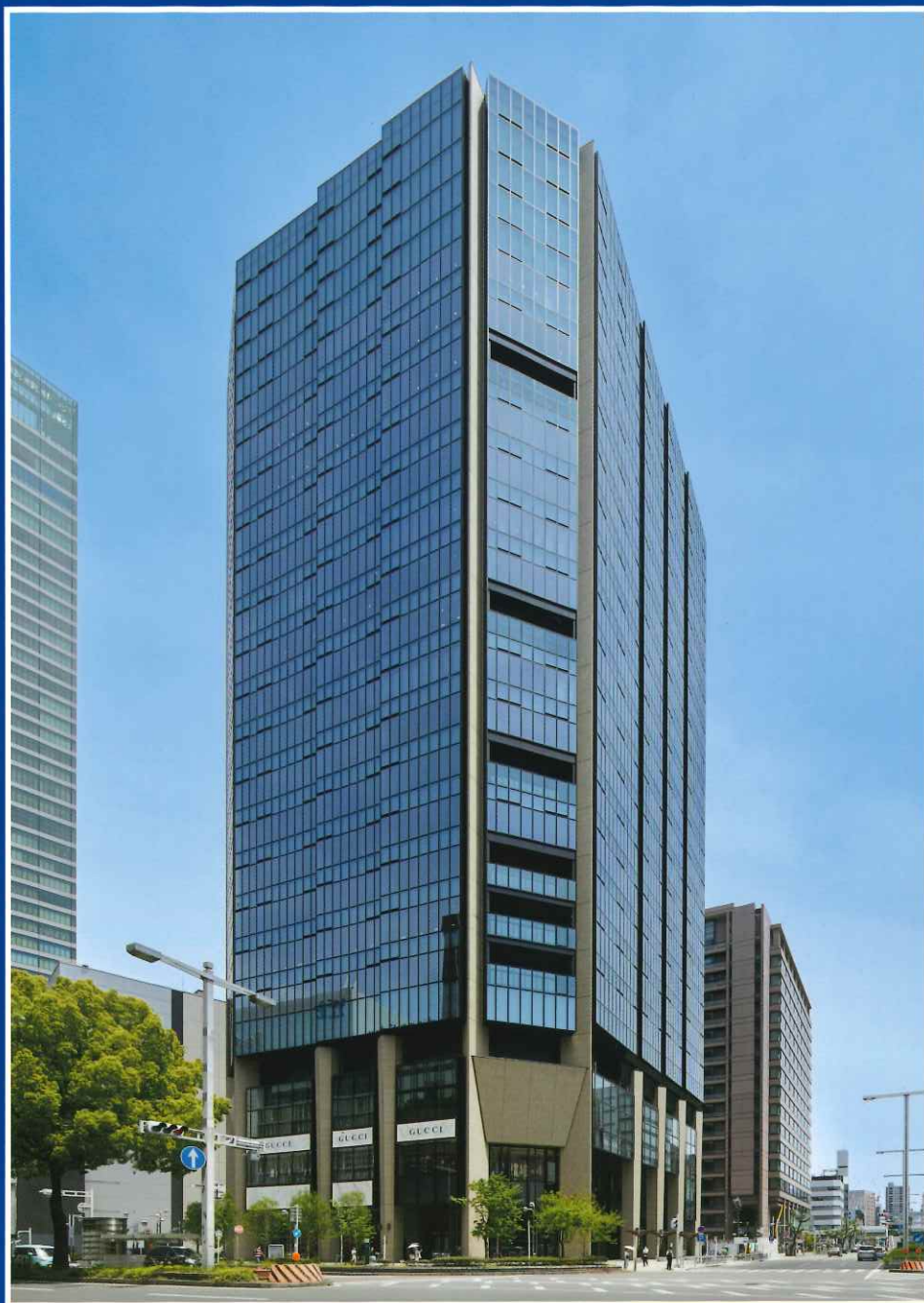
9

No.598

特集2 特集1

マンション改修の新しい流れ

国土強靱化の道路保全に貢献するNETIS



THE BOUSUI JOURNAL

何をもって「陶片浮き」とするのか

(有)鈴木哲夫設計事務所 代表取締役 鈴木 哲夫

タイル張り外壁の修繕では、打診工具を使用して調査を行い、不具合の症状を類別する。打音で判断する打診調査では、張付け状態を直接暴露して確認するわけではないので、下地の浮きか、タイル接着モルタルの詰まりが悪いのか、調査経験を積んでも音で聞き分けることは極めて難しい。調査では、下地浮きや欠損のほか、タイルのひび割れなどを類別するが、そのうちの一つに「陶片浮き」と類別することがある。

そもそも「浮き」という用語は、後天的な事象として劣化不具合を指す用語であり、剥離した状態やその予備群を指している。その定義を前提としてモルタル張りの陶片浮きは、タイルの陶片が接着モルタルから分離してタイルだけ剥離した状態ということになるのだが、この状態が頻繁に発見されることはなく、ほとんどが下地との接着不良である。

写真1は、陶片の経年的な挙動はないが、接着モルタルが詰まっていない状態である。この状態を陶片浮きというのはおかしくないだろうか。写真2は、下地浮きと判断していたものを暴露したところ、下地と接着モルタルは接着していたが、タイル陶片の裏足に「接着モルタルが詰まっていない施工不良」(詰まり不全)だったので、この場合は浮きではない。写真3も下地浮きとされた部位である。この場合は、躯体面の浮きと陶片の詰まり不全が併発している状態である。つまり、タイル張り接着面の下地浮きがあって経年劣化とするものの、一方では施工上の問題とする陶片の詰まり不全も併存した状態とみることができる。

陶片浮きとされる詰まり不全は、タイル張りの施工に起因するものであるから、経時変化による劣化を想起する陶片浮きと表現することは用語が不適切であり、事実の状態を表わしていないのである。

このように、経年劣化と施工不良に起因するものを含めて浮きとすることは、評価としてふさわしくない。特に、瑕疵(契約不適合)問題になったときは、めったに見かけることがないタイルの陶片だけが剥がれた状態にあるものを除き、経年劣化と施工上の問題を区別する意味で、「陶片浮き」という用語の使い方を注意すべきである。

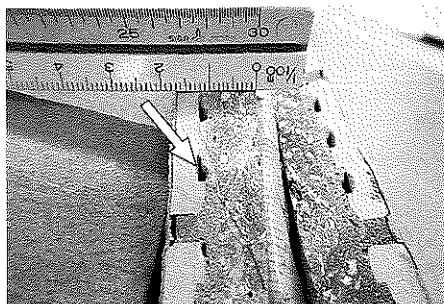


写真1 陶片浮きといわれる接着モルタル詰まり不全 (矢印)



写真2 新築施工時点の接着モルタルの詰まり不全 (躯体との接着は良好)

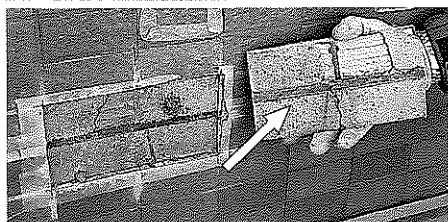
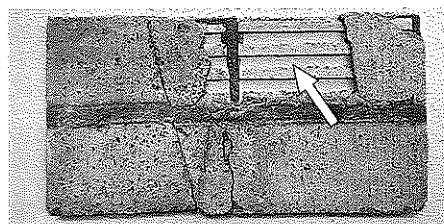


写真3 接着モルタル詰まり不全 (上矢印)と経年劣化の躯体面の浮き (下矢印)が併存